様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１６１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８１２６２

研究課題名（和文）教員を目指す学生の「声」を育てる授業の開発

研究課題名（英文）Development of a program where the students who intend to be teacher are trained in voice

研究代表者
頃安　利秀（Koroyasu, Toshihide）

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：４０２３４９２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：　この研究は，教員が子どもたちに直接働きかけるための手段である「声」を育成するためのプログラムを提案することが目的である。教員にとって発声や姿勢，朗読等の必要性をアンケート調査より確認し，声楽の授業の中で声と姿勢との関連性について分析し，また義務教育段階に於ける姿勢やバランスについての理論研究を行い，授業プログラムの開発を行った。そして，大学院生を対象とした授業科目「教師のための声とからだとことば」の中で授業を行い，さらに読み聞かせによりことばを相手に届かせる演習を行い，学生のレポートをテキストマイニング手法で解析し，この授業プログラムのもたらす効果を分析し，その妥当性を実証した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to propose a program where the students are trained in "voice" as a means to directly reach out to children. For that purpose, first, a questionnaire survey was conducted, asking about the knowledge of vocalization and posture. Regarding "voice", a training program was developed from an analysis of the relationship between voice and posture in a class. Regarding "body", a theoretical study on posture and balance at the level of compulsory education was conducted. The class subject "voice, body and words for teacher" was carried out by the developed program being utilized, and furthermore, training was performed to make the words reach others by reading books aloud to them. The reports prepared by students after the class were analyzed by a text mining method, the effects that this class would bring about were clarified, and the validity of this education program to nurture the "voice, body and words" of students intending to be teacher was proved.

研究分野：声楽

キーワード：教員　声　姿勢　読み聞かせ

１．研究開始当初の背景

平成 20 年度より，鳴門教育大学では修士課程の新しいカリキュラムとして，現代の教育課題に応えうる教育実践を構想し展開するための知識と観点の形成をねらいとする科目として広領域コア科目（必修）が開設され，その中の授業科目として「教師のための声とからだとことば」の授業が始まった。この授業では，音楽，体育，国語を専門とする３人の教員が協同して授業を担当し，「声，からだ，ことば」を，教育実践力のコアと考え，教員を目指す学生が「声とからだとことば」について理論的に理解し授業の中で実践できるような能力を育成することを目的としてこの授業を行っている。毎年，現職教員や教員を目指している学生から，教員の実践力を育む授業として大変人気があり，受講希望者も多い。

２．研究の目的

教員を目指す学生には，子ども理解と教科に関する高度な専門性に基づく授業が構想できる能力が求められる。しかし彼らが教壇に立ったとき，授業で語りかける最も直接的な手段である教員自身の「声」が子どもや生徒に届いていなければ，どんな立派な授業構想ができていても，その効果を上げることは難しい。効果を上げるためには，授業の中で発する教師の声がしっかりと子どもに届いていなければならない。ところが現今の教員養成系大学では，教員に必要な「声」を育てる授業は，ほとんど行われていないのが現状である。教員を目指す学生自身の「声」に関しては，大学の授業の中で行われる模擬授業や，教育実習の事前事後指導等の中で指導教員や教育現場の教員から適宜指導を受けるぐらいで，あとは個人の資質や能力に委ねられている場合がほとんどである。

この研究では，子どもに届く「声」の育成を目標に，「声」と「からだ」と「ことば」に視点を置いた，学校教員としての授業力の向上を目指し，音楽・体育・国語の専門を異にする教員が協同して，学生の「声」を育成する授業プログラムを提案することを目的としている。

３．研究の方法

（１）研究は，教員を目指す学生，及び現職教員の声と姿勢についての意識の調査から始めた。

①　教科専門科目「初等音楽Ｉ」の受講生を対象に，声と姿勢についてアンケート[1]による調査を行い，教員を目指す学生のうちどれくらいの学生が，教員にとって声がいかに大切であるかを理解しており，また声の出し方について学ぶ必要性を感じているのかについて調査した。

②　鳴門教育大学附属学校・園の現職教員を対象に，主に発声と姿勢についてアンケート調査[2]を行い，現職教員が自分の声と姿勢についてどれくらい意識を持っているかについて明らかにした。

（２）次に現行の声楽の授業を受講している学部学生，及び大学院の「教師のための声とからだとことば」を受講している大学院生を対象に，朗読と歌唱の際の声と姿勢について録音・録画により記録を取り，その分析を行った。その結果を基に，発声の授業プログラムを開発した。

（３）「からだ」の面については，主に，義務教育段階に於ける姿勢やバランスについての理論研究と，実習を前にした学部学生に対する「健康・スポーツ科学Ⅱ」，大学院の広領域コア科目「教師のための声とからだとことば」の授業プログラムの開発を行い，ペアエクササイズをとおしての，姿勢やバランスの意識づけ変化についての省察レポートの分析を行った。

（４）以上の研究を踏まえた上で，大学院の広領域コア科目「教師のための声とからだとことば」の授業を実施した。この授業の目的及び主旨・到達目標は以下のとおりとなっている。

《学校の中で教師が子どもと向き合うとき，コミュニケーションの手段として教師に必要なのは，子どもに伝わる声であり，子どもに向き合うからだであり，また子どもと共感できることばである。この授業では，子どもや生徒との多面的で柔軟な交流の土台としてのからだ感覚や筋肉的感覚を磨くこと，歌唱や朗読で自分の声をしっかりと相手に届けられるようになること，また絵本の読み聞かせパフォーマンスで，相手の呼吸を引き込む方法を体感することを目的とする。その中で自分の「からだ」を通して自分自身や自分の声と向き合うことにより，「声」と「からだ」と「ことば」に視点を置いた教師としての授業力の向上を目指していく。》

（５）2014 年度の広領域コア科目「教師のための声とからだとことば」が終了した時点で，講義全体に対する総括的なレポートを学生に記述してもらい，テキストマイニングの手法で解析し，この授業のもたらす効果について分析し，この授業プログラムが，教師を目指す学生たちの「声とからだとことば」を育てる授業としの妥当性を実証した。

４．研究成果

（１）教員を目指す学生及び現職教員に対する声と姿勢に関するアンケート調査の結果

①　教科の専門科目「初等音楽Ｉ」は，小学校教員を目指す学生が選択必修として履修する授業で，2013 年度は学部１年生と大学院

[1] 2013 年 11 月 22 日／29 日実施，鳴門教育大学学部１年次生 105 人に実施，有効回答数 102

[2] 2014 年７月／８月実施，鳴門教育大学附属幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校の教員 94 人に実施，有効回答数 64

生（長期履修生）合わせて 105 人が受講しており，有効回答数は 102 であった。

質問事項は全部で 15 項目あり，すべて 5 段階評価で行った。ここではその内の声と姿勢についての意識に関する質問項目を取り上げる。結果は次のとおりとなった。

A)　学校教員にとって声は大切である。

| | | |
|---|---|---|
| 1 そう思う | 84 | 82.4% |
| 2 ややそう思う | 17 | 16.7% |
| 3 どちらとも言えない | 1 | 1.0% |
| 4 あまりそう思わない | 0 | 0.0% |
| 5 そう思わない | 0 | 0.0% |

B)　学校教員のための声の出し方について学ぶ必要がある。

| | | |
|---|---|---|
| 1 そう思う | 60 | 58.8% |
| 2 ややそう思う | 33 | 32.4% |
| 3 どちらとも言えない | 7 | 6.9% |
| 4 あまりそう思わない | 1 | 1.0% |
| 5 そう思わない | 1 | 1.0% |

C)　自分の姿勢についていいと思っているか。

| | | |
|---|---|---|
| 1 そう思う | 4 | 4.0% |
| 2 ややそう思う | 3 | 3.0% |
| 3 どちらとも言えない | 26 | 25.7% |
| 4 あまりそう思わない | 38 | 37.6% |
| 5 そう思わない | 30 | 29.7% |

②　鳴門教育大学附属校園の現職教員に対して行ったアンケート調査では次のような結果になった。

A)　教員を目指す学生は発声や呼吸，姿勢について学ぶべきだと思いますか。

| | | |
|---|---|---|
| 1 学ぶべきだと思う | 23 | 36.5% |
| 2 できたら学んだ方が良い | 39 | 61.9% |
| 3 学ぶ必要はない | 1 | 1.6% |

B)　あなたは声の出るしくみについてご存知ですか。

| | | |
|---|---|---|
| 1 よく知っている | 1 | 1.6% |
| 2 大体知っている | 26 | 41.3% |
| 3 あまりよく知らない | 32 | 50.8% |
| 4 まったく知らない | 4 | 6.3% |

C)　自分の姿勢をどう思っていますか。

| | | |
|---|---|---|
| 1 いい方だと思う | 14 | 24.1% |
| 2 悪い方だと思う | 40 | 69.0% |
| 3 特に意識したことはない | 4 | 6.9% |

以上のアンケート調査から，学生も現職教員も教員にとって声は大切であり，発声や呼吸，姿勢について学ぶべきであると 90%以上が思っている。そして自分の姿勢については，どちらもほぼ 70%の人が自分の姿勢は悪い方だと答えていることがわかった。

（２）声楽の授業での成果

平成 26 年度の学部１年生の授業「声楽」の受講生７人と，大学院の広領域コア科目「教師のための声とからだとことば」の受講生２人について，簡単な歌唱と朗読をしてもらい，その時の様子を録画し，声と姿勢について観察した。

①　歌唱時の姿勢

次の写真１は，平成 26 年度の学部１年生の授業「声楽」の中で録画した時のものである。大学に入学したばかりの学生が，唱歌「ふるさと」を歌っている時の映像から抜き取ったものである。全員が猫背か前かがみの姿勢で，中には頭が前に突き出ている学生もいる。また腰が前に出てからだが反った姿勢の学生もいた。その時に出ていた声については，聴覚上の印象による判断ではあるが，全体的に力のない弱々しい声で歌っていた。さらに音響学的な測定が可能になればより科学的な考察もできるものと考える。音響だけではなく呼吸の量や速度なども「届く声」の要素としては重要であると予想できる。

写真１　歌唱時の姿勢

次に，この学生たちが１年次を終える頃に再度録画を撮って，入学直後の映像と比較したところ，このように改善された（写真２）。全員かなり鉛直線上に真直ぐ立つことができて，バランスも良くなっている。声そのものも４月の時点よりもからだを使った声になってきていた。

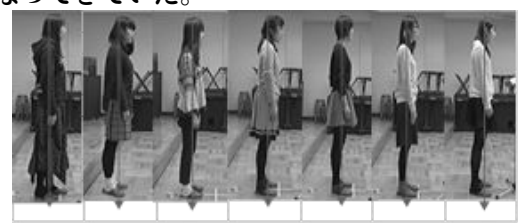


写真２　歌唱時（10 か月後）の姿勢

②　良い姿勢とは

アレクサンダー・テクニークを基にした『歌手ならだれでも知っておきたい「からだ」のこと』[3]の中で，歌うときの基本的な姿勢のバランスとして，次の６つの場所が鉛直線上に並ぶことを指摘している。上から順に，ＡＯ関節（環椎後頭関節），腕構造，腰椎，股関節，膝関節，足関節の６つである。これらの場所がバランスよく鉛直線上に位置することにより，「筋肉は不必要な緊張から開放される」と述べている。これはあくまでも基本的な姿勢のことであって，歌うときには当然からだは自由に動くことができなければならない。「歌う」ということは，からだ全身の働きだからである。

次の写真３は広領域コア科目「教師のための声とからだとことば」の受講生の中から選んだ大学院生二人に朗読と歌唱をしてもらったときの録画から抜き取ったものである。

---

[3] メリッサ・マルデ他（2010）『歌手ならだれでも知っておきたい「からだ」のこと』春秋社，pp.11-47

写真３　朗読時の姿勢の比較

それぞれ左側の写真は何も注意を与えないで朗読してもらった時の姿勢で，右側は姿勢を直してもう一度朗読してもらったときのものである。両学生とも普段は腹が前に突き出て背中が反った姿勢で立っており，日本人男子に多い姿勢であり，将来腰痛になりやすい姿勢でもある。その場でできるだけ鉛直線上にバランスが取れるように姿勢を直したところ，息が以前よりも深くなり，より開放された声になった。しかし本人たちは，修正後の姿勢が，自分では前屈みに立っているように感じたと感想を述べた。つまりその学生のこれまでの習慣で，腹を突き出し反った姿勢に慣れてしまっているので，姿勢が真っ直ぐになっているにもかかわらず，感覚的には前屈みに感じるのである。そして，放っておくとまたもとの反った姿勢に戻ってしまうのである。このように姿勢はその人が生きてきた環境の中で自ら獲得してきた習慣に負うところが大きく，自分一人で改善していくのは困難である。

③　声と呼吸と姿勢

昔から,「良い声の半分は良い呼吸から生まれ，良い呼吸の半分は良い姿勢できまる」と言われてきた。つまり良い姿勢ができていれば呼吸が深くなり，呼吸が深くなれば良い声が生まれる，ということである。それでは良い姿勢とはどのような姿勢のことであろうか。野口体操の創始者，野口三千三は，真っ直ぐに立つことについて，次のように述べている[4]。

「人間が二本足で立つことにおいて一番楽なあり方を探ると，それはからだの長軸が重さの方向（鉛直方向）・地球の中心にまっすぐにつながった在り方を見つけることから始まります。」また,「骨がからだの重さを受けてくれることが，すっきりした立ち方の基本です。」

これは先ほどのアレクサンダー・テクニークで述べられている，からだの６つの点が鉛直線上に並んだ姿勢と同じと考えてよい。そのように立つことにより，余分な筋肉の緊張が少なくなり，自分の身体の重さを動きのエネルギーとして効率よく使うことができる。つまり力強い声を出すためには，力強い息を必要とし，そのためには身体の重さをしっかりと足の裏に乗せる姿勢が必要になるのである。

④　声の共鳴

教室の中で教員の声が子どもに届くためには，声のより良い共鳴が必要である。歌唱するときにはその人のからだが楽器となり，声は息により生じた声帯振動で生み出された音声を，口腔や鼻腔，また身体に共鳴させることで，より遠くに届く声になる。そのためにはバランスの取れた正しい姿勢で立ち，余分な力みをなくして，身体の重さを使った力強い息が出せるようになることが重要である。

（３）「からだ」についての研究成果

姿勢やバランスの発育発達上の重要性についての理論研究については，とりわけ幼少期における運動リテラシーの育成の重要性が明確になった。そうした立場から，大学生や大学院生の段階での，姿勢やバランスの再構成のための意識づけをねらいとした，授業内容の開発を行った。とりわけ，幼少期の運動発達に対する省察を，具体的なペアエクササイズをとおして行う事によって，体幹の屈曲や捻りの動き，抗重力活動を支える，身体の後背部分の動き，頭部の反射誘発的な動き，などの重要性を省察するプログラムを開発できた。さらに姿勢やバランスへの省察を通した，子供たちに声を届けるからだという意識，子供たちの声を受け取るからだという意識，の深まりが，省察レポートから読み取ることができた。

（４）広領域コア科目「教師のための声とからだとことば」での実施

以上の成果を元に，大学院の授業の中で実践的に授業を行った。授業計画は以下のとおりである。

| | |
|---|---|
| 1 | 新生児の体幹の動きから学ぶ（からだの重さ） |
| 2 | 匍匐動作の体幹の動き（抗重力活動） |
| 3 | 体幹を立ち上げ，運ぶ動きとバランス |
| 4 | 様々な体幹動作とリズム |
| 5 | 他者の体幹の動きと関わる。 |
| 6 | からだの力を抜くことを理解し実感する。 |
| 7 | 姿勢と呼吸の関係を理解し腹式呼吸で声が出せる。 |
| 8 | 腹式呼吸から生まれる声で朗読ができる。 |
| 9 | 腹式呼吸から生まれる声で歌唱ができる。 |
| 10 | 朗読と歌唱による発表 |
| 11 | 絵本の読み聞かせを聞いている自分の視線を感じる。 |

[4]　野口三千三（2003）『原初生命体としての人間』岩波現代文庫，pp.7-11

| | |
|---|---|
| 12 | 絵本の読み聞かせを聞いている自分の呼吸を感じる。 |
| 13 | 絵本の読み聞かせをしながら相手の視線を感じる。 |
| 14 | 絵本の読み聞かせをしながら相手の呼吸を感じる。 |
| 15 | 絵本の読み聞かせで、相手の身体と呼吸とを引き込む。 |

前半（1～10）の声とからだの講義と演習とで身につけたことを，授業の最後の5回で実際にことばを相手に届ける演習の中で実感できるようにした。内容は以下のとおりである。

第 11 回：絵本の読み聞かせを聞いている自分の視線を感じる。実際に絵本『はじめまして』(すずき出版）の読みあい活動を通して，自身の声とからだとでことばを伝える際の「視線」の重要さを実感する。

第 12 回：絵本の読み聞かせを聞いている自分の呼吸を感じる。絵本『でんしゃにのって』（アリス館）の読みあい活動を通して、自身の声とからだとでことばを伝える際の「呼吸」の重要さを実感する。

第 13 回：絵本の読み聞かせをしながら相手の視線を感じる。絵本『かいじゅうたちのいるところ』の読みあい活動を通して，自身の声とからだとでことばを伝える際，相手の「視線」を意識することの重要さを実感する。

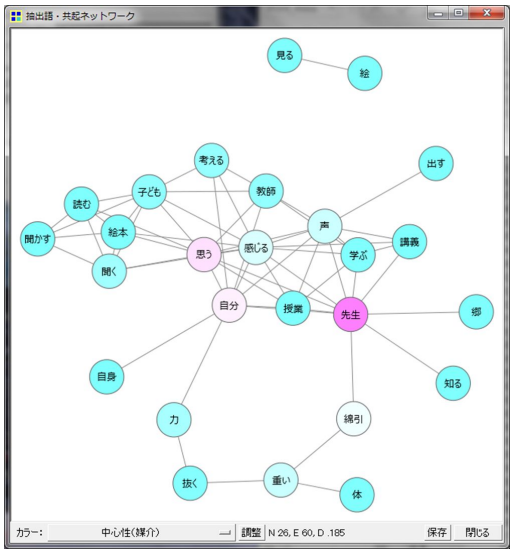
第 14 回：絵本の読み聞かせをしながら相手の呼吸を感じる。絵本『11 ぴきのねことあほうどり』（こぐま社）の読みあい活動を通して，自身の声とからだとでことばを伝える際，相手の「呼吸」を意識することの重要さを実感する。

第 15 回：絵本の読み聞かせで、相手の身体と呼吸を引き込む。絵本「バムケロシリーズ」（文溪堂）の読みあい活動を通して，自身の声とからだとでことばを伝える際，相手の身体と呼吸とを「引き込む」ことの重要さを実感する。

（5）授業結果の分析

2014 年度の総括的なレポートを，テキストマイニング[5]の手法で解析し，共起ネットワークを調べた結果，一般の講義等で中心になる「考える」「知る」という語よりも，「感じる」「思う」の語がネットワークの中心であり，「感じる」「思う」の語が多くの語とネットワークを結んでいることが明らかになった。

このことは，この講義の身体論的な核心と関わる結果と考えている。つまり，この講義は，自身の声やからだについて考え，知ることが目的ではなく，自身の声やからだ，人に届く声を感じたり，からだの重さや力が抜けた状態を感じることそのものを目的とした成果が現れたものと考えている。また「思う」がネットワークの中心にあるのは，この授業が客観的な知識を増やすことを目指したのではなく，自身の声とからだとことばとを常に主観として「思う」ことを目指した成果と考えている。




（テキストマイニングによる抽出語・共起ネットワーク）

「教師のための声とからだとことば」では，あまりにも日常化してしまっている「声」「からだ」「ことば」について，身体論的に浮き彫りにする（「感じる」）ことで，教師になるための身体に常に思いをいたす（「思う」）ことを実現したと考えている。

参考文献：

野口三千三（2002）『野口体操　おもさに貞く』春秋社

メリッサ・マルデ他（2010）『歌手ならだれでも知っておきたい「からだ」のこと』春秋社

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1件）

① 頃安利秀，「教員を目指す学生の『声』を育成する授業の開発」，学校音楽教育研究，日本学校音楽教育実践学会　第 20 巻，2016

〔学会発表〕（計　5件）

① 余郷裕次，「島田ゆか絵本作品の研究Ⅷ－『バムとケロのもりのこや』の分析を中心に－」，第 129 回全国大学国語教育学会西東京大会，2015 年 10 月 24 日，創価大学（東京都・八王子市）

② 頃安利秀，「教員を目指す学生の『声』

[5] KH Coder：樋口耕一氏によるテキストマイニングのためのフリーソフトウェア

を育成する授業の開発」，日本学校音楽教育実践学会第 20 回全国大会，2015 年 8 月 13 日，大阪成蹊大学（大阪府・大阪市）

③ 余郷裕次，「島田ゆか絵本作品の研究Ⅶ－『ぶーちゃんとおにいちゃん』の分析を中心に－」，第 127 回全国大学国語教育学会筑波大会，2014 年 11 月９日，筑波大学（茨城県・つくば市）

④ 余郷裕次，「島田ゆか絵本作品の研究Ⅵ－『うちにかえったガラゴ』の分析を中心に－」，第 126 回全国大学国語教育学会名古屋大会，2014 年５月 18 日，愛知県産業労働センター（愛知県・名古屋市）

⑤ 余郷裕次，「島田ゆか絵本作品の研究Ⅴ－『バムとケロのおかいもの』の分析を中心に－」，第 124 回全国大学国語教育学会青森大会， 2013 年５月 19 日，弘前大学（青森県・弘前市）

６．研究組織

(1)研究代表者

頃安　利秀（KOROYASU TOSHIHIDE）
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：40234926

(2)研究分担者

綿引　勝美（WATAHIKI KATSUMI）
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：80144559

余郷　裕次（YOGO YUJI）
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：90191535